

道心

編集 日光山 禅昌寺「道心」編集室
発行 平成14年1月10日
〒732-0002 広島市東区戸坂山根3-2-7
☎ 082-229-0618 zenshoji@bronze.ocn.ne.jp



禅昌寺住職 横山正賢

「祈り」

天地一杯の命を頂いている私
天地一杯に生かされて
天地一杯の生き方を孫に示して
天地一杯の命を還したい

齢を重ねるほどに一年が早く過ぎ去るように思うのは私ばかりでは無いでしょう。私は三原市中之町という農村（現在は住宅街）にある、寺の次男に生まれました。物心が付いてからの育った環境を申しますと、山裾に農家が点在する小高い丘の上にあり、隣家の農家とは四方凡そ百米は離れていて長閑な田園地帯でした。

この頃の三原は三菱重工業・帝國人造絹糸・セメント工場といった工場が盛んで、ほとんどの農家は兼業農家、農家の人々の朝は早く、起きて洗

面をすますと、先ず東の空を仰いで柏手を打ち廻を拝む事から始まり、夕方暗くなるまで野良仕事をしておられた。今のように騒音の無い時代だから、農家の家々から聞こえてくる祈りの音は、私たちに何言うことはない安らぎを与えてくれたように思います。私は本堂で父の唱えるお経の終わりを聴き計って叩き起こされぬよう起床する毎朝のリズムがありました。

子供達の手伝いも毎日の生活の中に組み込まれていて、朝の掃除や夕方の風呂を焚くこと等小学生になる頃から分担が決められていました。

四季折々に小さな畑では有りましたが耕すこと、種を蒔いたり苗を植えたり、冬には山に薪ひらいや木を切りに、薪割り等父や兄弟で助け合っていることが、ごく自然に生活として営まれていました。子供の私たちは四季折々の山に生る木の実・草の実・山や野に生る果物が出来る時節や其の群生地等を知り尽くし、集落中の子供ら五・六人（四・五年生を中心とした仲間）から、時には十数人（小学生高学年から四・五歳の幼児まで）を越える集団が、甘味を求めて山野を駆け巡ったものです。次の年にも良く生るように、集落の子供達共有の財産として、大事にしたものでした。今思いますと四季折々の生活は自然と共に有って、当に天地一杯から命を頂いて、天地一杯に生かされている、という実感が有ったように懐かしく思い起こされます。

その生活の夕べには「明日が天気です有りますように」「明日が良い日でありますように」「朝起きると「今日が無事でありますように」「……只祈

る」子供でも何かその様な祈り（心）が有ったように思います。檀家の人々は正月三が日・お盆・春秋の彼岸・歳末には寺に参り無事に生かされている喜びを感謝の祈りとし、明日の希望が叶えられるよう祈る祈りを感じておりました。

何かというとお寺に集い、子供らのそろばん・手習いも皆寺に集っておりました。戦後物質的に豊になるにつれて地域社会には集会所・公民館が整備され、人々の集いはそれらが中心となってお寺から人々が遠ざかって行きました。それと同時にメディアの発達により人々の素朴な天地一杯に生かされている命に感謝するという祈り等も消え、祈りも物質的欲求形祈りが強くなったように思います。貧しき時代には個人的注文は付けようもなく「只祈る」のみ、皆と助け合って共に生かされ生かし合って生きた生き方が、日本の素晴らしい文化を育んで来たように思います。

政治も経済も学校も家庭も先の見えない混沌としている今、世界人類が生かされ合う素朴な「只祈る」という祈りを致したく思います。

皆様に於かれましては菩提寺禅昌寺を祈りの拠所とされて、生かされている限り生き生きと生きる集いを多く持ち、自分達の生かされた証を未来に還（伝え）したいと願って止みません。

昨年十二月末までNHKの朝の連続ドラマ「ほんまもん」は、昔日本の貧しくとも良き時代の、日本人の誰しもが持つていた「未来に伝える命・生き様・わびさび等」を、祖先から自分へ受け継ぎ更に子孫へ伝えてゆくという、日本民族文化への覚醒を訴えている作者の気持ちが伺えます。

大本山永平寺参拝記

東区尾長東在住 郷土史研究家 渡邊 健

大本山永平寺にお参りし、芭蕉没後三百年に当たり、奥の細道の足跡を辿り、旧加賀前田藩の史跡を訪ねた、平成六年十月十七日参拝の記録である。

旧制中学時代、寄宿舎生活を共にした気の置けない級友東城町の川原君夫妻を誘い二組の夫婦が連れだち、好天の秋日和を、のんびりゆつくり三日間の旅に出かけた。

広島発八時二十分、岡山でうち合わせ通り川原夫妻と合流、京都↓福井は青森行特急「しらとり」を利用したが全車両満席、全くよく人が動くものだと感心、福井着十二時五分、京福電鉄(当時は安定経営)に乗り換え、福井発十二時四十分、既に刈り取りの終わった田圃を眺めながら進。車窓の水田風景も永平寺が近くなるにつれ両側の山すそが近く、農家の裏山には植林

された杉の幹が美しく林立している。今の季節より約一ヶ月早く芭蕉もこの山里を歩いた。当時はほとんど人家のない、道端を草が覆い茂る山道であったろう。

車中三十五分で永平

寺駅着、電車を降りた客は三々四十人程、駅からはなだらかな坂道、両側に土産店が並び、ぶのは何処の門前町も同じ風景、この坂道を歩いていると

参拝客を運ぶ観光バスが次々と上つて来る。

『有難き大本山を時世とも』

観光バスにて信者らの来る——川原君詠——

『五十丁山に入りて、永平寺を拝す。』

道元禪師の御寺なり。邦幾千里を避けて、

かかる山陰に跡を残したまふも、

貴きゆえありとかや——奥の細道——

前もつて方丈様より「永平寺に参詣すれば特別な案内をしてもらえよう頼みであるから、総受所の大西坊を訪ねるように」と配慮を頂いていたから、早速若い雲水さんに申し出た処、「少々お待ちを……広島からの連絡承つています。控え室で待つていて下さい」

次から次とおとずれる参拝客を扱いながらテキパキとした対応である。ほんの一二分待つたところで「こちらへどうぞ」これも若い眉目秀麗の雲水さんが現れた。「私共禅昌寺檀信徒のホープ泰賢坊が雲水首座を勤め修行されてから五年後」私はこの雲水さんに泰賢さんの姿を重ね併せながら案内してもらった。

「本日はようこそ本山へ参拝されました。これから私が案内致します……此処で七堂伽藍についての簡単な説明……他の参拝客の迷惑にならないよう必ず左側に寄つて私の後ろに従つて下さい。撮影は自由だが但し雲水にはカメラを向

けないで下さい」……参拝順路に示されている東司・僧堂の説明をうけ、上り勾配の廊下をすすむ。他の修行僧と出会う度ごと、立ち止まり片手で会釈する雲水さんを見ていると厳しい道場の戒律を感じる。

※山門——唐様総けや木造り重層楼門で両側からは仏法護持の神四天王が睨んでいる。寛延二年(一七四九)改築で永平寺最古の建造物——(という事は芭蕉が永平寺に参詣したのが元禄二年(一六八九)だから、芭蕉が拝観した建物は現存しない)

※修行僧入山——「私は今春二月修行僧としてこの山門をくぐり永平寺に上つて来ました。私共がこの山門をくぐる事の出来るのは修行僧として入山するとき、修行を終えて山を下りるときの一生涯に二度だけです。いつかテレビで紹介された修行僧入山風景「タノモ」」と入山をお願いして、なかなか許してもらえない場所が此処です。雪の中、素足に草鞋履きのスタイルはご承知のことと思います。ふるえる寒さの中、入山を許されるまで此の場所で数時間待ちますが、冷気で足の感覚など失せてしまいます。修行僧入・下山の山門通過以外、この山門を通ることの許される人は禪師(貫首)さま唯一人です。

※山門に掲げられた「吾母」の額は道元禪師宝治二年(一二四八)の真筆と伝える。

案内を頂いた雲水さんに感謝の心で合掌、参拝記念として瓦志納を供え、売店で数珠を買って求めて本山を辞す。秋の夕暮れは早く、心忙しい。翌日は加賀市前田家因縁の実性院、また芭蕉の句碑を求めて全昌寺を訪れる。

『庭掃きて出でばや寺に散る柳』

私も年齢を重ねて今年は喜寿の七十七歳、人生の後編部門にさしかかり、『日々身辺を掃く』でありたいとねがっている。

平成十四年新春 合掌





静寂に育まれて

森野 邦子

(三十二才)

広島に来て間もない頃、周辺を散策していて朝の参禅会のことを知りました。宗派に関係なくどうぞお越しくださいとのこと。恐る恐る訪れてみましたらその週の日曜日には青山

俊董先生の講演会があることを知り、まだ様子もよくわからないまま参加させて頂きました。そしてご法話が率直に心に響く不思議さにとても感謝致しました。

カウンセリングを学んでいた関係で、またカウンセリングを受けていたこともあり、座禅や瞑想に興味を持ち一度体験してみたいと探していた矢先のことでしたので、その出会いにとても驚きました。関心があっただけで何の知識もなく、座り方さえ分からないままの参禅、教えて頂いたとおりに見よう見まねでの始まりでした。ただ座ってみたい……という気持ちだけで檀家でもなく仏法のしきたりも何も知らず、一通りすがりにすぎずこのまま座っていてもいい

のかなと思うこともしばしばで、当初は大変緊張した毎日でした。そんな不慣れでぎこちない私に、方丈さま、宗賢さまはじめ、参禅に来られる方々はさり気なく暖かに接してくださいました。

座っている中、ふと周囲に気づくと、いつも変わらない静かな時間が広がっている。

春は小鳥の声。それはもう驚くほど禅堂いっぱい小山いっぱい充満します。身体中が小鳥のさえずりに満たされていくようでとても清々しく心地良い。春から夏にかけて季節が移るとそれに応じて蛙の声や蟬の声が加わります。時に雨の日は、しつとりと降る雨音に耳を澄ますと、こころの芯まで優しく落ち着いてくるようです。

ある夏の日の座禅中のこと、カサカサという音に開け放った窓からふと裏山の斜面を見ますと、なんときつねの親子が駆け回り無邪気にじゃれ合っていました！あんまり可愛くってずっと見ていましたら、こちらまでほのぼの楽しくなってくるのです。夏場の「ほとほり」がすつと退くと虫の音になり秋の涼風はホッと心地良くお堂を渡ってゆきます。

山門の横手にある細かい葉の紅葉が今年もとても美しく色づいていました。そして今の時期冬はしんと静か。雪が降り積もった日は一層静けさが深まります。微かな呼吸と共にただひたすらしんと静かな時間がどこまでも広がっています。そしてそんなささやかな毎日のことが有り難く私の心をゆつたりとのびやかにしてゆく

のでした。

また、昨年の秋に催された「TSUKIMI 寺」コンサートでのフルートとギターの調べは心洗われるひとときとなりました。手作りの想いのこもったコンサートにとても多くの方々がいらして、朝の静寂とはまた違った縁日のような賑やかで楽しい参禅昌寺さんなのでした。また、ひろしまチャイルドラインのチャリティーを兼ねてのことと知り、微力ながら私も活動に参加させていたたこうと思いました。

座らせて頂くようになりまだ一年と少しですが、そんな何気ない季節の移ろい、ささやかな毎日の出会いに、私の中で何かが少しずつ変わろうとしています。どこか奥深い場所では何かが育まれている……。以前は自分が何とかしなければと懸命に動いていましたが、本当は何かもつと大きなものの流れが在ってそれに任せていれればいいのかもしれない……という安心感、信頼のようなものが生まれつつあるように思います。

私の中に静かな時間が宿り育っていくことが嬉しく、そんな場所に巡り合えましたこと、感謝の気持ちでいっぱいです。そして何より、さり気なく暖かく見守ってただけます方丈さま、参禅会の方々の何気ないお気遣いに安堵して励まされ、今日まで続けることができました。本当に有り難うございます。

これからも無理のない範囲で変わりなく参禅させて頂きたいと思っています。今後ともどうぞ宜しくお願い致します。有り難うございました。

罰あたり

東区在住 護持会役員

齋 藤 昭 夫

「空気がなくなつた」 罰あたり続編

その後も月初め

の日曜日には家内

(空気)と一緒に坐

禅に行っていたが、そ

の空気が突然に亡くなった。

三十三年連れ添つた、いや新潟の片田

舎の出身で一級下の幼なじみであつた

から、五十数年間も一緒にいた事にな

る。

台所で食事の支度をしていて「メマ

イがするわ」と言つてうずくまり、そ

れっき意識がもどらず、五十六才の

生涯をとじた。今まで家内が先に逝く

などと思ひもよらないことであつた、

病院へ運んだ夜は、只々「大変なこと

になつた「困つたことになつた」と縲

り返すうちに一夜があけた。

大勢の方々に野辺の送りを頂き、一

段落した五月の初旬、禅昌寺へ行く途

中に顔なじみの犬がいた、いつものよ

うにシッポを振ってくれる「オイお前

も知っているオバサンが死んで、オジ

サンが一人ぼっちになつてしまつたヨ」

と言つた途端に涙で前が見えなくなる

始末。ご飯を炊けば操作まちがいで寝

ばなの十一時頃に炊き上がるし、偉そ

うな事を言つても、男の一人暮

らしはサマにならない、石

川達三の小説「四十八

歳の抵抗」ではないが、

五十八歳の現役?の

男に物事をすべてあき

らめろ、はコクな話で

もあり、そうかと言つて

新しいアクションを起こすに

は遅すぎる年齢でもあり、心は大きく

揺れ動いている今日この頃です、初盆

もすませたし、「空気」がなくても生き

ていける様なたくましい雑菌みたいにな

らう。

花すおう

咲くこの道が好きという

陽炎の如 妻逝りゆきて

「嘘のような 本当の話」

空気がなくなつた続編

一人寂しく正月を迎えるより、魂と

魂が出会う國と言われる、インドと釈

迦生誕の地ネパールを旅行した。ガン

ジス河と共に生きるヒンズー文化の牙

城、沐浴で有名な都市ベナレス、人々

は河と共に生き死んでいく、死後の灰

をガンジス河に流してもらふことが、

最高の死に方とされているベナレスで

の出来事。現地ガイド、ミスターシャ

シャンク氏と二人で飲んでいる処へ、

同じガイドのミスターカーン氏が加わ

り、三人で宴会が始まつた、突然カー

ン氏が「サイトウサン、ニッポンドコ

カラキタ」「原爆の広島市から来た」

「ヒロシマノ ヘサカヲ シッテイル

カ」……広島のお方なら「戸坂」は

知っているが、十分位前に知り合つた

インド人がヘサカと言つた時点で、目

は点になり、追うように「ゼンショウ

ジ トイウ オテラヲ シッテイル

カ、私の頭は完全に真っ白、上の方で

亡き家内が「あなた先に来ておりまし

た」と言っている様で、頭が混乱して

しまつた。

戸坂は私が住んでいる所で、禅昌寺

は亡妻のお骨を預かつてもらつていて

お寺、いくら魂と魂のぶつつかり合う

國とは言え、嘘のような本当の話です。

機会があれば又、訪ねて見たいと思つ

ております。

追伸

やはりお寺との関わりで、新しい空

気に巡り会い、一緒に参禅している、

今日此の頃です。

「一期一会 人生日々是好日」

合掌

御詠歌という言葉は昭和三十二年観世流の謡曲を習い始めた頃、先輩から「御詠歌のようなものだなあ」と言われたことを想い出した。その後御詠歌と出会う機会もなく時が過ぎた。

平成二年仕事の関係で香川県丸亀市に単身赴任した。四国は四国巡礼十八ヶ所のある特異な土地柄であり、私も平成三年から丸亀市近くのお遍路巡りを始めた。白装束の多くのお遍路さんに出会い感化されたのか、その年の秋

御詠歌に出会えた機縁

安佐南区在住 護持会役員 中山俊郎

から会社の休みを利用し、自家用車で一番札所から約一年かけて結願した。その後も年一回の割合で時には家内と一緒に巡礼を続けている。巡礼を重ねるうちに多少気持ちに余裕も出来たのか、お遍路さんの団体が朗々と御詠歌を唱えられている姿に感動したものだ。

昨年四月禅昌寺の趣味の会アンケートで御詠歌の会が出来ることを知り、さっそく家内と共に申込みをした。

その後六月中旬に御詠歌の会結成準備会が開催された。講師の先生も出席

されており、方丈さんを中心に、会の名称・稽古日・会の運営方法・その他会費やお道具等について話し合いが持たれた。先ず講師の先生の紹介があり、先生は山口県新南陽市の洞心寺住職原田凡念先生・会の名称は方丈さんより「勝友詠道会」ではとの提案があり、出席者全員賛同した。稽古日は毎月第二金曜日と第四金曜日となり、第二金曜日は会員だけの練習日、第四金曜日は指導者による指導日と決め、何れも

午前二時間、早速六月第四金曜日から稽古が始まった。

梅花流御詠歌には道具（教典・鉦・鈴等の法具）の作法を始め色々な作法がある様ですが、初めは作法より御詠歌を中心に指導していただく様になった。第二金曜日は会員だけの練習日で作法にとられず午前十時から約二時間CDやカセットテープに合わせ、今までに習った詠讃歌を全員で繰り返し練習している。途中御茶の時間もあり大変楽しい二時間です。

第四金曜日の指導者による練習日

は、午前九時から本堂において般若心経を唱え簡単な法話のあと別室にて指導を受けます。指導に当たって講師の原田先生は詠讃歌の説明や御法話などその他世間話を交え、皆さんが退屈しないように気遣われながら指導頂いています。

詠讃歌は歌うものではなく唱えるも



の、又声の良さや節回しの巧みさを競うものではなく、唱える喜びを味わうものと言われています。石の上にも三年という諺のとおり三年は続けてほしいとも言われております。法具の扱い・作法など全て出来るようになるまでに五年十年続ける必要がある。十年過ぎててもまだ完全出来ない人は沢山

おられるようです。

六ヶ月詠讃歌の指導を受けて来ましたが、まだ唱える喜びを感じません。女性の皆さんと一緒に唱えるので低音が出し辛く苦労しています。藝の道は厳しく奥深いものと聞いていますが、民謡にも「一生稽古」という言葉があります。謡曲・民謡と共に御詠歌も長く続けたいものと思っています。

最後に「禅の友」の中で「梅花流とは曹洞宗の詠讃歌の流名で詠讃歌とはお釈迦さまやお祖師さま方などの恩徳を讃え、そのみ教えやご供養、お祝いなどの詞を美しいメロデーにのせお唱えする詠歌と和讃のこと」とあります。

また今は亡き丹羽廉芳禅師さまが梅花流の根本の教えを次のように示されています。

「詠讃歌は仏祖の恩徳を讃仰する仏讃歌であるので真心を込めて一生懸命にお唱えすることがもつとも大切なことである、つまり仏道修行である」と。

梅花流の詠讃歌は昭和二十七年道元禅師さま七百回大恩忌の記念事業として創立され、今年は創立五十周年になります。

勝友詠道会では皆様のご参加をお待ちしています。ご一緒に一生懸命詠讃歌を唱え仏道修行をしてみませんか。

◆ 昨年の行事報告 ◆

昨年から従来の仏事法要に加え趣味の会等の集いを始めました。その報告をします。

● 年頭祈願法要

- ・ 一月一日午前十時～昼まで
- ・ 延べ七十余家族参加

● 青山俊董尼老師講演会

- ・ 二月二十八日

- ・ 八十余名の参加者

● 彼岸法要&護持会総会

- ・ 三月十七日

- ・ 参拝者百三十余名

- ・ 回向帳送付百六十三件

● 秋尊降誕会(お花祭り)

- ・ 四月七日

- ・ 参拝者五十余名

● 日帰り旅行

- ・ 六月十四日(木)「安福寺花菖蒲園」
- ・ 四十八名参加天気に恵まれ好評、秋にもどこかへ…と言うことでした
- ・ 計画できず残念。

● 開基会

- ・ 六月十日(日)第一回会合を持たれ。
- ・ 例会日は毎月第一・三の日曜日 第二・四水曜日何れも午後一時半より行われた。

- ・ 現在登録会員九名六段から下は？段の熱戦が交えられている。

※新年は寒い時期を避けて三月からとなつています。(≒多数のご参加)

- ・ 会費は参加の都度三百円。

● 盆前諸堂大掃除

- ・ 七月二十九日(日)

- ・ 暑い中を五十六名のご奉仕に感謝合掌

● 恒例孟蘭盆会法要

- ・ 八月六日(月)

- ・ 参拝者百三十七名 回向帳送付百七十八件

● 御詠歌の会

- ・ 八月二十四日(金)初会合を開きました。

- ・ 毎月第二金曜日は午前十時より会員のための自主練習、第四金曜日午前九時より講師を招いてご指導を願った、現在の会員九名

※皆さん大きな声を張り上げての練習は、ストレス解消にベリグッドのようです。(多数のご参加をお待ちしております)

- ・ 月会費三千円。

● 上田宗箇流茶道教室

- ・ 昨年四月よりお稽古を始めました、一応第二・四水曜日を原則として開催しました。
- ・ 講師の先生は、お家元内弟子望月慎

也先生お水屋料一席二千円です。(お気軽に)ご参加下さい)



● 「Tsukumi in 寺」コンサート

- ・ 十月二十七日(土) 世界的な演奏活動をされているフルート奏者大代啓二先生、ギター佐藤紀雄先生、参加者三百四十余名全員感動する。皆さん「すばらし」を連発。

● 登山の会

- ・ 十一月十七日(土) 宮島町「弥山」
- ・ 参加者十名 紅葉真っ盛り、宮島の紅葉は何度か見ているが、こんなに美しい紅葉は初めて、好天に恵まれ参加者一同幸せ連発！

● 年末大掃除

- ・ 十二月十六日(日)
- ・ 暖かい掃除日和に恵まれ五十余名の中に、お婆さんとお孫さん、親子・姑・嫁さんご一緒のご奉仕を頂き感謝多謝 合掌

◆ 今年度の行事予定 ◆

● 登山の会

- ・ 二月二日(土) 白滝山(三原市)
- ・ 登山口は忠海駅より
- ・ 集合場所時間 広島駅南口切符売り場 午前九時集合

- ・ 参加費 忠海駅まで往復実費

● 青山俊董尼老師講演会

- ・ 三月一日 金曜日 午前十時半より午後一時半より三時半まで

- ・ 会費 午前・午後各千円(二日二千円)

● 彼岸会法要護持会総会

- ・ 三月十六日 土曜日 午前十時半より
- ※多数のご参加をお待ちしております。

● 御詠歌の会

- ・ 毎月第二金曜日は午前十時より会員のための自主練習、第四金曜日は午前九時より講師を招いてご指導を受けます。

原稿募集

皆様の随筆、旅行記、体験談、趣味の短歌俳句など何でもけっこうです。お寄せ下さい。次号原稿締切は三月末日にお願いいたします。